

介護スタッフの介護行為と空間利用に関する研究 ～旧型および新型特別養護老人ホームにおける比較調査を通して～

石井研究室 飯島 伸幸 木村 和志

1 研究の背景と目的

日本の高齢者居住施設は、個室化および小規模な生活単位で空間を構成し、その中で個別的なケアを目指すユニットケアというかたちで新たな歩みをはじめた。特別養護老人ホームにおいては、今後開設される新施設は個室・ユニットケアが基本となり、利用者の居住・生活環境の質的向上が大いに期待されている。

本研究では、従来型の旧型特養と新型特養のモデル施設ともなった特養を調査対象とし、スタッフの介護行為および空間利用の質的・量的な比較分析を通して、旧型および新型特養におけるケアに関わる差異を分析することでユニットケアの特徴を明らかにし、計画的な基礎的指針を得ることを目的とする。

2 調査の方法

特別養護老人ホームFホーム（旧型）とKホームの3階（新型特養）を対象として、介護スタッフの追跡調査を行った。調査日の全介護スタッフの介護行為の内容、展開場所について1分刻みで記録を採った。

3 調査対象施設の概要

いずれも定員50名の施設である。Fホームは1977年開設で、居室は4人部屋で構成され、食堂と玄関前のロビーから構成される典型的な従来型の空間構成である。生活空間としてのしつらえはほとんどされていない。一方、Kホームは2000年に開設し、全室個室で構成されている。6～8人を1つの単位にリビングとキッチンを持ち、小規模な生活単位が空間的にも実現されている。調査対象のフロアは4つのユニットによって構成されている。〈表1・図1〉。

4 調査結果と考察

4.1 スタッフの滞在時間の比較考察

Fホームでは、居室での滞在が44.2%と多く、玄関前のロビーが11.3%、廊下が14.1%となっている。スタッフ室での滞在も17.9%と高い。一方Kホームでは、食堂兼リビングが28.4%、キッチンが16.2%とユニット内での滞在が多く、居室の滞在は17.3%である。スタッフ室での滞在は8.4%と少ない〈表2〉。

Kホームでは4つのユニットに分かれて各スタッフ

はケアを行っているが、必ずしも自分のユニットだけの滞在にとどまらず、状況に応じて各ユニット、その他の共用空間でケアを行っている。

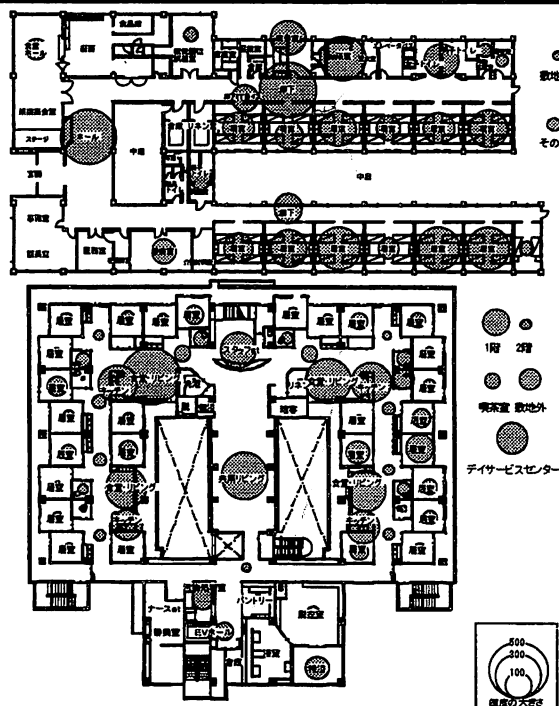
4.2 介護内容の比較考察

介護行為の内容を8分類し、その割合を分析した。Fホームでは基本介護（食事・排泄等の直接的な介護）が44.2%と多い。生活援助（会話、寄り添いなどの間接的な介護）は16.6%である。記録等の直接事務は7.9%である。各個人による差異はそれほど見られず、決まった作業を決まった時間に一斉に行う形である。

一方Kホームでは基本介護は35.2%であるが、生活

〈表1〉 調査対象施設の概要

	Fホーム	Kホーム
所在地	宮城県鳴瀬町	千葉県八街市
開設	1977年4月	2000年2月
定員(調査フロア人数)	50名(50)	50名(25)
日動最大スタッフ数	8(16～18時)	8(11～13時)
延床面積/1人あたり	1204㎡/24.08㎡	3884㎡/73.68㎡
調査実施日	02.10.23.(水)	02.11.24.(日)
調査時間	午前8時～午後8時の16時間	
空間構成	生活空間としての空間のしつらえがほとんどされていない典型的な従来型の特養。	private, semi-private, semi-public, publicと生活空間が構成されている。
居室構成	4人部屋。持込み家具には制限。	完全個室。持込みの家具は自由。
食事	食事は厨房で盛り付けられ、各居室、ロビーに運ばれる。朝、昼、晩決まった時間に一斉に食事をす。	食事は厨房からユニットごとに運ばれ、盛り付けする。ご飯はユニットごとに炊く。各ユニットで食事時間が異なる。



〈図1〉 各施設の平面図（上：Fホーム、下：Kホーム）とスタッフの滞在場所の頻度

援助も32.4%と高い。直接事務は1.5%と少ない。スタッフ室での事務的な滞在が少なく、ユニット内外でのスタッフ同士の会話を通して間接的に情報交換をしていることが分かる。また、基本介護・生活援助の割合に個人差が見られるのも特徴的である。

このほか、Fホームでは居室での基本介護が62.0%と高いが、Kホームでは居室でも生活援助が45.8%を占めるなど、その内容に違いが見られる(表2)。Fホームでは廊下等での移動も10.0%占めているがKホームではほとんど見られない。

4.3 スタッフ別・時間帯別にみた基本介護と生活援助の量的な比較考察

基本介護の量をスタッフ別、時間帯別に見ると、Fホームでは早朝、食事時、就寝準備に基本介護が大部分を占めていることがわかる(図2)。一方、Kホームでは個別に対応する朝食時および夕食時、就寝準備時に基本介護が多くを占めるが、その他の時間帯では分散している。つまり、その直接介護に関わらない時間帯に生活援助が多く行われていると言える。

さらに入居者一人あたりの量でそれぞれを比較すると、必ずしも一人あたりが受ける直接介護の量には相違がないことも分かる(図3)。スタッフが2倍確保されていることで、基本介護の部分の質を確保した中で、

ユニットケアの本質である個別ケアが生活援助の中で行われていると見ることでよい。

5 まとめ

本研究の比較考察を通して、個室・ユニットケア型の新型特養におけるケアの量と質の特性について明らかにすることができた。新型特養の空間構成が介護に与える影響は大きく、すなわちそのことは入居者の生活への影響を意味する。ユニットケアを望ましい形で運営するには、スタッフ数が従来型の施設よりも必要となるなど負担は少なくないが、そこから得られる入居者の生活の質はそれ以上のものがあるであろう。

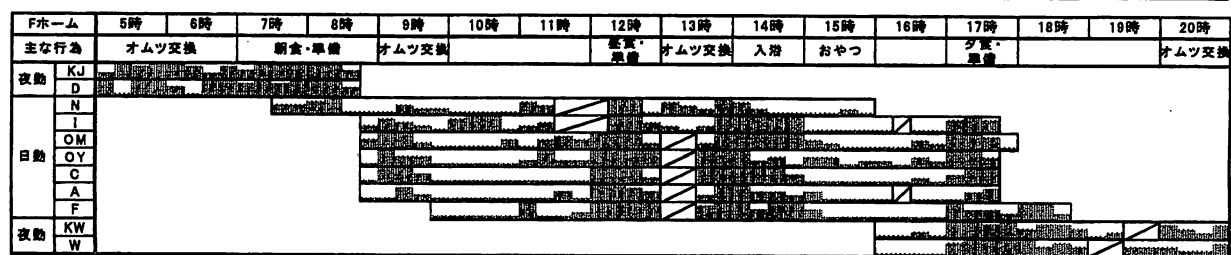
本調査結果は、入居者の生活の調査をあわせて見ることにより、より明確になるものと思われる。

〈表2〉 空間別にみたスタッフの滞在量(割合)と介護行為の内容

	Fホーム			Kホーム		
	滞在量	割合	割合	滞在量	割合	割合
居室	194.5 (44.2%)	62.0%	23.9%	68.8 (17.3%)	47.8%	45.8%
リビング(LD)		14.1%		113.1 (28.4%)	42.2%	33.0%
キッチン				64.4 (16.2%)	24.8%	38.0%
ホール・食堂	49.5 (11.3%)	37.4%	27.7%	27.9 (7.0%)	8.5%	61.9%
廊下	82.3 (14.1%)	34.9%	44.5%	19.4 (4.9%)	29.6%	22.5%
スタッフ室	78.7 (17.9%)	13.7%	41.8%	33.5 (8.4%)	42.7%	34.7%
その他	55.1 (12.5%)	8.2%	3.2%	71.5 (17.9%)	5.4%	4.6%
		87.5%	59.2%		89.8%	37.4%
		4.3%	34.8%		34.1%	28.5%

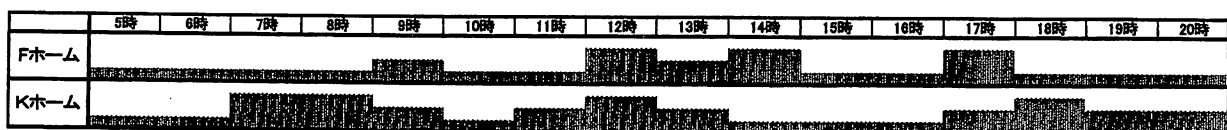
分/一人あたり
(割合)

基本介護(%)
生活援助(%)
その他(%)



〈図2〉 施設別にみた(上:Fホーム、下:Kホーム)のスタッフの基本介護の量

~3分 ~6分 ~9分 ~12分 ~15分



〈図3〉 各施設の入居者一人あたりの基本介護の量

~3分 ~6分 ~9分 ~10分